

名古屋市
中川区

理学療法士

林 研吾さん

医療法人財団善常会
グリーン訪問看護センター

理学療法士

運動機能向上のために
運動療法を行う。

きっかけは、
高校3年の夏の怪我

甲子園を目指し野球に励んでいた最後の夏、靭帯損傷の怪我に見舞われた。時を同じくして祖父母が2人亡くなったことで、林さんは「将来は人の役に立つ仕事がしたい」と急に考えるようになったという。野球部OBの理学療法士から仕事について話を

聞く機会があった。人と深く関われる魅力的な仕事と感じ、「理学療法士なら人の役に立てる」と、迷いなくこの道に進んだ。

理学療法士のおもしろさと難しさは、「関わった人が前向きになること」「個性にあったリハビリの提供」そして「利用者の変化に敏感に気づくこと」。いずれも、相手に合わせて工夫が必要

なため、とてもやりがいがあるという。

介護職員との
“利用者情報の共有”が重要

「生活基盤を支えている介護職員には、本音を言う利用者さんが多いんです。介護職員から利用者さんの本音を聞いたり、日常生活の様子について話を聞くことが多々あります。そういった情報共有の中から、自分の対応を見直すことがあります。たまに自分のリハビリが良かったとの利用者さんの声を聞くと本当に嬉しいです」と笑う。

リハビリは、通常のリハビリ業務に加えて、医師、看護師、作業療法士、介護職員等との会議や、少しの空き時間での立ち話も大切で、情報を共有してチームで行わなければならない。

そういった多職種との連携について、「とにかくそれぞれの専門職の意見はとても興味深く、いつも勉強になります」とまた笑う。

「自分自身がリハビリを受けるなら、前向きで明るい人にやってもらいたいです」。林さんはそう言って、底抜けに明るく笑った。

多職種連携のポイント

専門性は“行為”にあるのではなく、“視点”にある!

皆さんが、介護職員、看護師、理学療法士、作業療法士等、様々な専門家の仕事を考えたとき、おそらく、その専門家が行う“行為”をイメージするのではないのでしょうか。

もちろん“行為”も重要ですが、実は、それぞれの専門家はその利用者に対して向ける“視点”に、むしろその専門性が顕著に現れます。

例えば、入浴介助を行う場合、看護師は、利用者の方の肌の不調や疾患に気づくことがあるかもしれません。リハビリテーションの専門家は、浴槽への入り方や座り心地の状態に注目し、介護職員は、利用者の方の表情や声色から満足感や疲労感を感じとり声をかけるでしょう。

このように介護の現場では、それぞれの専門家が異なる“視点”で利用者の方を気かけ、その情報を専門家間で共有し連携することで、質の高い介護を実現します。

また、こうした連携により専門家同士が相互理解を深めることで、それぞれが、介護に関わる専門家として成長することにもつながっています。



命に携わる
仕事をしたいと思った!

物心がついたときには、すでに医療関係の仕事につきたいと思っていたと話す藺田さん。双子の弟も作業療法士である。

人の役に立ちたい、命に携わる仕事がしたいと高校の進路で職業を探していたときに作業療法士を知り、大学で学んだ。

「大学進学の時、悩んだのが、理学療法士か作業療法士でした。わたしは、こころの領域に触れ、より疾患のある人に寄り添えるのは作業療法士ではないかと、決めました」。

人は、花への水やりや、散歩、旅行などの楽しみや生きがいのほか、例えば、頭をかいいたり、ほおをさすったりといった、ちょっとした仕草や癖が、何かしらの原因で、できなくなったときに、ストレスを感じたり、失望したりする。そのときに寄り添って、大事な作業や活動に再び取り組めるように支援することが仕事。

とても難しい仕事だが、対応した利用者自身が、作業を通して、こころの隙間を埋めることができたなど

感じられた時が一番嬉しいし、そこにやりがいを感じると話す。

常に介護職員と
相談しながら対応

作業療法士は機能の回復を図ったり、残存した機能の活用や生活環境の工夫を通して作業をできるようにする。このような役割のなかで、常に連携を図って仕事は進められている。

現在、50~60人の利用者を担当している。常に、複数の専門家との共同作業になるため、情報の共有はとても重要だ。

介護職員との連携では、「作業療法士は24時間関わることはできません。普段の生活での状況について、最も身近にいる介護職員に話を聞き、どこに不具合を感じているのかを共有しています」と教えてくれた。

刈谷市

作業療法士

藺田 鈴菜さん

医療法人豊田会
介護老人保健施設ハビリス 一ツ木

作業療法士

日常生活動作を訓練
しながら支援する。



理学療法士・作業療法士 って何するの?

リハビリの専門家にインタビュー!

